

# ひとつの出会いに思うこと

浅野 恭子

出会いにはいろいろな「出会い方」がある。出会いが始まる人と人との一連の活動において、動いている事実を目の前にした時、人のいろいろな感じ方を思い、自分においても自分が生きて変化していることが実感として感じられる。

\* \* \*

ガラス戸のこちら側で、光代ちゃんのお母さんと知人と私とが光代ちゃんの学校での様子を話題にして話をしている。木戸がバタンと動く音、人がバタバタと駆ける音、「ハハハハ」と笑う声などが同時に聞こえてきて、突然耳でとらえられる世界が転換したような気がした。と、突然ガラガラと大きな音。ハッと身を半分浮き立たせる。「あー、きっとお友だちとおもちゃ箱を全部ひっくり返しているんですよ」とお母さん。今度は「バンバン」「バンバン」という声の合間にカチッカチツという

音。しばらく続いていくうちに、だんだん聞こえてくる音が大きくなる。ガラス戸にドンと何かが当たる音がして、ハッと後を見ると、ガラス戸越しにこちらを見て「ハハハハ」と声を出して笑っている女の子と男の子の顔があった。手に持っていた玩具の鉄砲をこちらに向けて「バン」と撃ってくる。「バン」という声でこちらも防ぎ姿勢をしたり、こちらからも二人にむけて手で鉄砲の形を作ってお返しをしたりやりとりが続く。そこにいた五人が鉄砲でのやりとりの場に参加していた。楽しくよく動いたあいつつ場面であった。

光代ちゃんのお姉さんが帰って来て、光代ちゃん、お姉さん、私の三人で近くの公園に行くことになった。お姉さんがビヨンビヨン跳ねるようにして、時々後をふり向きながら先頭を歩いている。光代ちゃんが立ち止まった。前方左斜め上の電線

に留まっているはとを見つけて指さし、私の顔を見て声は伴わないが口を開けて「はと」のようにお話する。「はと？」と言うとうなずいてもう一度はどのいるほうを指さし私の顔を見てもうなずき、両手を体の横につけてパタパタと鳥が飛ぶ時のしぐさをして、一本の指で左側から右に向って大きく弧を描き、私をのぞき込むようにして「はと」の口の形をする。「うん、はとね。こうやってとぶね」と言って手を上下させながら少し跳ねる。光代ちゃんも両手を上下にパタパタさせながら跳ねる。そして二人で走り出して先に歩いていたお姉ちゃんに追いついた。

公園でシーソーに乗って、子どものニコニコしている顔を見ながらバタンバタンと繰り返している時、ふと自分において「ちょんまげ手まり歌」が聞こえ、すさまじい速さでその物語が思いつき出されてきた。(注)

ちょんちょ ちょんまげ

まげ ちょんちょ

ころり ころころ

首 ちょんちょ……

(「ちょんまげ手まり歌」)

\* \* \*

やさしい殿さまを柱とする藩のこと。藩のあり方やり方に常に「ありがたい」ものとして考え受け入れるように言いきかされて育った女主人公おみよが六つの年になった。六つになったことで両親を含む周りの大人が、いわゆるやさしい藩のしきたりで、おみよが「やさしいむすめ」になるのか、「お花畑に入る」ことになるのか、関心を向けるようになる。同時におみよ自身は今までの家での生活よりも、同年齢の友だちである藩一郎といっしょに活動することのほうへより関心が向けられた場面が展開する。子どもが、社会の現在・未来を担う存在であることを周りの大人がはっきり認識できるように動きを始める時がある。おみよの場合は子どものほうから動き出したというよりむしろ、藩のしきたりという側からの動きに押されて子どもの動きがかなり規定されていった感がある。

おみよに「やさしいむすめ」になることが言いわたされ、その儀式(山んばのはこの前で子どもの両ひざから下を切断する)が行なわれる。おみよにはそれに関連したまわりの動きやしきたりのことはよく分からない。母は「ありがたいお話しじゃ

こと。これはご先祖さまにご報告してさっそくおれいを申さねば……」と喜ぶ。藩の人は「……こわくない、こわくない。すぐにやさしいむすめになつてもどつてこれるぞ。……」と声をかける。全く「まな板の上の鯉」といった状態で「やさしいむすめ」になる儀式に臨んだおみよは、その後ずっと足の痛みを訴え続ける。この儀式はおみよにとつて、周りの動きに気がつき始める大きなきつかけになる。夢で、ため池のそばのお花畑に沈んでいる瘡一郎の「出してくれよう」と叫ぶ声を聞き、へそくい虫がついた父を藩の人に殺されたおみよは、瘡一郎を探して歩く。

「瘡一郎。やさしいむすめていやなもんじゃど。おまえといっしょに山んぼごっこをしたように走れんど。走れんだけならええが、すわったきりじゃど……」

「……わしはおまえが、出してくれ出してくれー言うのをなんべんも聞いた。そのたんびに玄蕃さまがわしをとめたんじゃ。……わしはのう、瘡一郎。いっぺん足をのばしてらくらくとねむりたいのじゃ。」

そこでユメミの花を食べたおみよは山んぼに出会う。

「おまえはだれじゃ」

「……お山からお山へ歩きまわつておる山んぼじゃ。知つちよるかろう」

山んぼとお山のいただきまでいっしょに歩きながら山んぼの話を聞き、今まで育つてきた社会の事柄のいきさつを知る。「お花畑に入る」ことが子どもの場合口へらしの為であったこと、大人の場合口へらしと藩の統治者にとつて都合の悪い考えをしている者をなくしていく為であったこと。絶対視されていた殿さまが、実は老婆の姿をした人の血を吸うものであったこと。「やさしいむすめ」になる儀式が、そこに住む人々に他の世界を知らせまい、分からせまい、見させまいとする為のものであったことなど。

「おじいどの。わしはわかつた。わかつたど。やさしい藩はおそろしい国だったのじゃな。わしはわかつたど」  
おみよがそうさげんだとき、じぶんのからだがかもう子どもではないのに気がついた。すらりとした、ひとりの年ごろのむすめになっていることがわかつた。山んぼ老人は、そんなおみよを見ると、しわだらけの目をほそめ

て、ふっふっふと笑った。「知ると言うことは、大きななることじゃ。すくすく大きくなることじゃ。しかしのう、おみよ」

「やさしい藩」と言われていた社会を知り、やさしい藩の山のむこうにはさまざまの国があることを見たおみよは、自分の行きたいと思う他の国に行くか、あるいは「やさしい藩」にもどるかどうするかを決断を迫られる。おみよが決断する瞬間は、深遠な、広がりのある、厳肅な時として感じられた。

「おじいどの。どうすればええのじゃ」おみよが心の中できけんだとき、おみよはじぶんがもうわかいむすめでないことに気づいた。……………

「わしいっべんに、おかあどのぐらになつたど」……「そのおかあどののは、なにも知らずに死んでしまうた。おじいどののは、それもしあわせじゃと言つたが、はたしてそうじゃろうか。……………わしいは、ほおつておくわけにはいかん。なにかも知つてしまつたいじょう、ほおつておくわけにはいかん。そうじゃ。わしいはひとりでもいい。わしいのみたこと、知つたことをつたえねばなら

んのじゃ。わしいは国にもどると」

おみよがそう決心したとき、おみよは、じぶんがひとりのおばばになつていくことに気づいた。

おみよは山んばとして「やさしい藩」にもどることを決意し、刀で体をすたすたにされながら自分が事実と認めたことを言い続け、新しい広い世界があることを言い続けた。

それぞれの国をめぐる山々（それは人と人がつくり出す社会活動のひとつの規範、あるいは粹の象徴としてとらえることができる）を歩きまわり、時に藩におりて行つては殺されるようなひどい目に会いながらも、山んばとして、よしと思ひ、決断したことを言い通し、在り続けているそんな山んばの姿に深い感動を覚える。

\* \* \*

「やさしい藩」のことについて、どのような立場や見方で考えるかによつていろいろな感じ方が成立するであらう。

「やさしい藩」のしきたりに忠実に生きていく人々にとつて、自分たちの藩の殿さまは「やさしい殿さま」であり、藩の一切をとりしきっている女番は「やさしいおかた」であり、住む國

はやはり「やさしい藩」なのである。そこで忠実に生きている人々においては、「やさしい……」ということばが成立する世界が展開していくのであり、その世界に住んでいることで、幸せな感じを感じることができているのである。

山んばの動きに即して考えてみると、「やさしい藩」は、そこに住む人にとっても自分にとっても「やさしい……」という表現はとうていできない世界であり、矛盾することが多く感じられる所である。

おみよが両親のもとで暮らしていた頃、瘠一郎と遊ぶことがいちばんの楽しみで、そのことが幸せな感じであった。自分の生きていく道を決断した瞬間から、おみよの幸せな感じは「やさしい藩」で感じられるものではなく、その他の国でもなく、自分が決めた道を歩くことの中に幸せを感じていったように思われる。幸せな感じ、それは自分がここと気づいたところで、自分がこれだと本当に思ったことを実践し、実現していくという動きの中に感じられるものなのかもしれない。そしてそれは、自分が創り出すことができるものなのだ。

\* \* \*

光代ちゃんのお母さんの話では、現在通っているろう学校幼

稚部のクラスで、元氣にお友だちとも楽しく過ごせていて、喜んで通学しているという。担任の先生との相談のうえで、週に一度、家の近くの幼稚園にも通っている。そこではよく部屋のすみで立ってお友だちのすることをじっと見ていることが多い。お友だちや先生から、光代ちゃんもいっしょに、という働きかけがあっても、じっとしている。幼稚園には喜んで行きたがるという。学校での動きと幼稚園での様子がずいぶん違うので、どうしたのかとお母さんとして心配していらっしやる。

光代ちゃんが幸せな感じを感じられる世界は、これからさらに広がっていくことであろう。そして幾たびか決断し、自己決定していく場面に出くわすことであろう。それらのいつか、どこかで山んば的な動きをする人に会えることであろう。おみよとはまた違う選択の仕方をしたり、違う進み方をしていくのかもしれない。

家族ではない、学校の友だちでもない私や知人との出会いが、光代ちゃんにおいても楽しく意味のある体験として生き続けてくれることを願っている。  
(お茶の水女子大学)

注 お茶の水女子大学児童学科児童文化研究室(本田和子先生)「作品を読む会」でとりあげたものである。